

果が交互に繰り返されて生ずるのが、すなわち観測される赤道東西風の周期振動に他なりません。

以上、舌足らずながら、突然昇温と準2年周期振動を例にとり、中層大気中における波の流れとの関係を概観しました。このふたつの現象はそれぞれ今から約30年前と20年前に発見され、その後の多くの観測的・理論的研究を経て、ともに10年ほど前にその大筋が理解されるようになったものです。そして現在でも、そのシナリオをよりクリアーカットなものにする努力が続けられています。

## 6. まとめ

中層大気には、まだまだ面白い現象がたくさんあり興味は尽きませんが、この小文の目的はそれらをすべて網羅することではありません。むしろ強調したいことは、放射過程にしる、ハドレー型子午面循環にしる、波の伝播にしる、或いは相互作用にしる、中層大気の中で起きている現象は雑多な要素が少ないが故に、その本質がきわめて単純化して考えられるという点です。これこそが中層大気を考える場合のひとつの大きな魅力であると言ってよいでしょう。近年の研究の跡をたどってみますと、1960年代から70年代にかけて、気象力学や大循環論をリードしてきたものは、実に波動伝播や相互作用といった新しい概念の具体化である中層大気力学だったと言っても決して過言ではありません。その意味から、ここに述べた突然昇温や準2年周期振動は単なる現象論的興味以上に、新しい力学の良き“教材”だったとも言えます。小学生の教材としてまず接地層を測らせることは必ずしも適当ではない、と言ったことの裏がえしとして、

気象力学を勉強するならば中層大気から始めなさい、と言えあまりにも我田引水に過ぎるでしょうか。スペースコロニーの住民云々と言ったのはその意味からだったのです。幸いにして、最近、松野・島崎 著「成層圏と中間圏の大気」(東大出版会)という素晴らしい教科書が出て、日本語で本格的に中層大気の勉強をすることが可能になりました。

しかしながら、気象学の歴史から一旦離れて、中層大気の気象学の明快さ面白さにまず目をむけることは、決して地上生物としての人間にまつわる気象を軽視することではありません。たしかに我々にとって天気や気候は重要なものであり、それに深い関心を寄せることは大切です。問題はその関心の持ち方、理解の進め方です。とにかく実用的に有益であることを至上命令とする工学は別として、いやしくも自然科学の立場から気象を見ようとする場合には、複雑な地表面附近の気象にとらわれることなく、自由な精神を以て、より大きな目で大気そのものを眺める努力が必要です。大げさな言い方を許してもらえば、物理学に限らず、一見実用と関係ない研究から生れてきた新しい知見が、結局一番重要な認識の根幹を作ってきたという事例は枚挙にいとまがありません。“急がば回れ”の諺どおり、対流圏の気象学も、一旦そこから離れた立場で考えることを必要にしている段階に到っているように思われます。

日本気象学会は来年で丁度百年目を迎えます。良い機会です。このへんで一度、それぞれの立場で気象に対する発想の転換をしてみませんか。中層大気の勉強もきつとそのひとつの糸口になるはずで。

## 第19回理工学における同位元素研究発表会のお知らせ

関係諸学協会の共同主催で、標記の研究発表会を開催いたします。この研究発表会の目的は、異なった専門分野の研究者が一堂に会し、同位元素および放射線の利用の技術を中心とした研究、およびその技術の基礎となる研究の発表と討論を行い、各専門分野間の知識と技術の交流を図ろうとするものであります。会員各位におかれては奮ってご応募、ご参加下さることを希望いたします。

会期 昭和57年7月5日(月)～7月7日(水)

会場 国立教育会館(東京都千代田区霞が関3-2-3 文部省となり)

発表申込 所定の申込書(1件1通)によりお申し込み下さい。所定の申込書は下記にて請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込 2-28-45

日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

TEL (03) 946-7111(代) 内線 261

発表申込締切 昭和57年3月1日(月) 必着

講演要旨 講演要旨集を発行します。発表申込みがあり次第、所定の原稿用紙(1,400字程度)をお送りします。

講演要旨原稿締切 昭和57年4月15日(木) 必着